

Title	感性と造形表現：その発達のメカニズム
Author(s)	梅澤, 啓一
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46591
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	梅 澤 啓 一
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 9 7 2 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 17 年 6 月 16 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	感性と造形表現—その発達のメカニズム—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 大橋 良介 (副査) 教 授 上倉 庸敬 教 授 藤田 治彦

論 文 内 容 の 要 旨

序文では、問題の輪郭と研究方法が述べられる。すなわち「感性」というものをマルクスから継承した意味での「人格」の契機として位置づけ、その上で、マルクスが示した「上向・下向」という方法論を基本的に採用する旨が、説明される。

本論は二部構成となっており、第一部「感性発達の基本的法則」では、まず問題の所在が述べられる。すなわち感性発達を、人格発達という全体的視野から捉え、一般にどのような意味規定において感性という概念が用いられているかを述べる(第一章)。次に感性発達の契機を、対象意識と主体意識の両面から考察し(第二章)、その上で人格を構成する感性発達の基本法則を、取り出そうと試みる(第三章)。かくして、人格発達の総合的かつ弁証法的な図式を浮かび上がらせることが眼目となる。

第二部は、学校児童の造形表現の発達過程を、実際の調査にもとづいて確認し、この発達過程の弁証法的な必然性を論証することを、基本の眼目としている。すなわち、児童の描画表現の発達には0歳から18歳頃までの五段階のヒエラルキーがあることを想定し、この発達が「弁証法的過程」を辿って、「階層段階の構造枠」を形成することを見ようとする(第四章)。

次に、感性と造形表現活動の発達メカニズムを、種々の事例調査から明らかにしようとする。その結果として、生理的で感覚的な感性が、対象意識の未分化の段階から、次第に分化の段階へ進むこと、そこから感性が多様化し、造形表現活動が意識的になっていくことを、明らかにする(第五章)。

結論部分は、こういった研究の成果を単に思弁的な主張にとどめず、実際の美術教育のカリキュラムに反映させることへの提言を含んでいる。

このあとに三つの補論がつづくが、それらは著者自身の思考の展開を跡付けるとともに、学界における本論文の意義をも示唆するものである。

なお、本論文はすでに一冊の書物として2003年に晃洋書房から出版されており、その分量は、本文と注を併せて、273頁である。400字に換算すれば500枚ほどである。

論文審査の結果の要旨

感性と造形表現の発達メカニズムという問題は、心理学、教育学、美学、現象学、等々の諸分野から、それぞれのアプローチが可能となる。著者・梅澤啓一氏は、論理的にはマルクスが『資本論』で用いた、かつ『経済学・哲学手稿』でも述べた、「上向・下向」と一般に呼ばれる方法を援用する。著者の説明では、「下向」とは、具体的な諸現象から出発して、これらを支配している法則を見つけることであり、「上向」とは、この抽象的な法則から具体的な事象にもどって、その全体像と本質を明らかにすることである。たとえば、論文の第一部「感性発達の基本法則」は、どちらかと言えば「下向」であり、第二部「感性と造形表現—その発達のメカニズム—」は「上向」である。

次に第一部の展開を見ていくなら、梅澤氏は問題の所在を人格発達という全体的視野から捉えようとしていることが分かる。その方法は当然といえば当然であるが、しかし単なる経験的な観察では済まない作業でもある。なぜなら、人格発達の全体を見る視野である以上、それは人格に関するひとつの哲学的洞察を必要とするからである。梅澤氏はここでもマルクスの人間観を参考とする。すなわち、実践を媒介として対象を主体的にとらえることを人間本質とし、ここから「人格」を、このような人間性の具体的様相と捉えるのである。ここから、感性発達の基本法則をも、対象意識と主体意識の両面において見出そうとする手法が、出てくる。

梅澤氏は感性発達の「基本法則」なるものを、テーゼの形では提出していないが、要するに、人間の感性が事物とのかかわりのなかで知性、理性、美的感性へと質的に転化し、しかしながら分化したあとも相互媒介的に働いて、人間を一個の人格として成り立たしめる (p. 85)、ということに集約されるであろう。

論文の主部をなす第二部は、この基本法則を学校児童の造形表現の発達過程に即して、実際の調査にもとづいて確認していくことを、基本としている。すなわち、児童の描画表現の発達には0歳から18歳頃までの五段階のヒエラルキーがあることを想定し、この発達が「弁証法的過程」を辿って「階層段階の構造枠」を形成することを見ようとする。この構造枠それ自体は、実験的に確認されるというよりは、人間である限りこのような段階を経るはずだという論理的テーゼの性格をもつ。しかし梅澤氏は、感性と造形表現活動の発達メカニズムを単なる論理的思弁にとどめるのではなくて、種々の事例調査から裏付けようとする。その結果として、生理的で感覚的な感性が、次第に対象意識の未分化の段階から分化の段階へ進むこと、そこから感性が多様化し、造形表現活動が意識的になっていくことが、明らかにされる。

結論部分は、こういった研究の成果をどのように教育内容とカリキュラムに反映させるかという問題への、実践的な提言を含んでいる。

梅澤氏の論文は、このようにして明確な方法論的意識と教育現場での幅広い調査にもとづくものである。もちろん、その特色はそのまま問題点に転化する。まず梅澤氏が感性の造形的表現活動の現場として設定したのは、主に絵画であって、彫刻や音楽は含まれない。口頭試問では、その点の説明が本人からなされたが、調査範囲の拡大や地域的限定性の吟味は、課題として残るように思われた。また、梅澤氏が基本的に踏襲するマルクスの方法論は、主義として採用するの でなければ、それ自体はマルクス以後の議論状況に鑑みて原理的に吟味することが不可欠である。その点も課題として残されているように思われた。

しかし梅澤氏は、現代の学界の主流が単なる実証的研究に終わって、論理的普遍性を得る努力を欠いていることを批判しているから、上記の問題点も、梅澤氏自身の側からの問題提起という積極的な面で評価することもできる。事実、基本法則を見いだそうとする第一部と、種々の事例調査を含む第二部とから成る本研究は、互いに有機的連関を持ち、教育実践上の意義を有すると思われる。

以上から、本論文は大阪大学文学研究科の博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。